

人生最期の医療に関する調査報告

「おまかせ」でなく 自分の最期を考えよう 伝えよう 書き残そう

2013 年 5 月

特定非営利活動法人 高齢社会をよくする女性の会

は し が き

世界トップレベルの長寿国日本において、最近ようやく人生最期の医療・介護のあり方への論議が高まってまいりました。その論議の中心には、専門家だけでなく、かけがえのない命の主人公である当事者が据えられてほしいと思います。

私たちは、「おまかせ」でなく自分の最期と真剣に向き合いたいと思います。

市民・当事者が人生最期の医療のあり方について、どのように捉えているかを調査し、これからの最期の医療措置のあり方に参画していきたいと考え、人生最期の医療に関して、2つの調査を実施しました。

1つは、全国の10歳代～90歳代の男女を対象とした調査です。もう1つは、医師と看護職を対象とした調査です。

調査の結果、次の3点が明らかとなりました。

- 1 延命処置をしてほしくないという意識は、年齢や職業（医師、看護師）、看取りの経験など、最期の医療に関する知識や経験により相違がある。
- 2 最期の医療について4つの延命措置について尋ねた。
心肺蘇生は71.3%、人工呼吸器装着86.6%、胃ろう85.4%、鼻チューブ86.9%が希望していない。
- 3 最期の医療について「書面にしている」人は1割に満たないが、「書面にしたい」と思っている人は6割近い。年齢別では、「書面にしている」人は80歳代以上13.6%、70歳代10.7%である。

気が付いた人々から、命の当事者として、専門家や家族におまかせでなく、自分の意思を表明することが大切と思っています。それは社会全体の倫理性と、個人の選択の多様性の上に立つのはもちろんのことです。

私たち高齢社会をよくする女性の会は、この調査に基づき、まず自分の最期について語り合い、書面にすることを提唱したいと考えています。そのことを通して長寿の総仕上げとしての最期が、みとり文化の形成につながることを願っています。

今回の調査に当たりご協力下さったすべての方に御礼申し上げます。

2013年5月

特定非営利活動法人 高齢社会をよくする女性の会
理事長 樋口 恵子

目 次

は し が き／1

第 1 部

I 調 査 概 要／3

1 調 査 目 的／3

2 調査対象・時期・方法、調査事項／3

3 回答者の性、年齢、職業、看取り経験の有無／4

II 調 査 結 果／10

1-1 あなたが意思表示できない状態になり、さらに治る見込みがなく全身の状態が極めて悪化した場合、鎮痛剤を使ってほしいか。／10

1-2 あなたが意思表示できない状態になり、さらに治る見込みがなく全身の状態が極めて悪化した場合、心肺蘇生・人工呼吸器装着をしてほしいか。／13

2 あなたが意思表示できない状態になり、さらに治る見込みがなく、食べられなくなった場合、延命のために栄養補給を望むか。／19

3 最期の医療について、あなたが望むことを家族が信頼できる人と話し合ったことはあるか。あなたが望む最期の医療について書面にしているか。／27

第 2 部

I 調 査 概 要／38

1 調 査 目 的／38

2 調査対象・時期・方法、調査事項／38

II 調 査 結 果／39

1 あなたは終末期医療・高齢者の介護にかかわったことがあるか。／39

2 あなたは終末期となった担当患者にどのようなことを実施しているか。／40

3 高齢者の患者・家族と終末期の医療方針について話す時、どんな困難を感じることもあるか。／42

4 終末期の担当患者について治療方針を決定する際、主要要素は何か。／43

第 3 部

自 由 回 答／45

[付 属 資 料]

集計結果表／47

調 査 票／56

執筆者 第1部 木間 昭子（高齢社会をよくする女性の会 理事）

第2部 渡辺 敏恵（高齢社会をよくする女性の会 運営委員・医師）